

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

法隆寺大鏡

第三十集



始



# 法隆寺大鏡第卅集挿圖解説

## 第一、第六、御物 黒漆螺鈿鳳紋唐櫃

通高一尺四寸三分、蓋高三寸六分  
蓋裏行一尺二寸五分、蓋裏高二寸一分  
蓋裏幅二尺九寸三分、身奥行二尺一寸四分  
蓋裏高五寸

蓋に面を取り稍少く甲を張る、結緒の懸る處左右に猪目透の鍍金縁金物あり、身の底縁また面取り、脚も圓に明かなる如く兩側の角を平にし、頭と底とに花唐草毛彫の金物を装し、一脚各二箇の菱紙を打つ、地は内外すべて黒漆なれども金粉の極て粗らに散れるもの處處に幽光を放つ、殊に螺鈿紋の中に在りては、其櫃身なると支脚たるとを問はず、すべて梨子地に金粉を蒔き、支脚の面取の部分も亦之に同じ、斯くして一は螺鈿紋の全形を浮立たしめ、一は局部の輪廓を鮮明ならしむ、唯惜むらくは年所を経るの久しき類破の跡甚だしきを修理塗替せる所多く蓋表の如きも其色稍古調と異り、梨子地も金色の變して黒漆塗のみとなれるあり、されど螺鈿の用法に至りては實に勁拔を極め、廿四五片の不滅貝を配置して、巧に鳥形を象どりて、文様化の妙味を發揮するのみならず、櫃身の高さ標示せる如く一尺四寸三分なるに對して、其三分一に相當する直径四寸七八分の大紋を散らせる意匠の大膽なるは、洵に其類例を見ること稀なりとす、殊に櫃の角々正側兩面かけて配せしが如きは、螺鈿九紋應用の最も嶄新なる趣向と云ふべし、螺鈿の使用は藤原時代よりして、單に九紋若くは花唐草文様として現はれ、或は蒔繪と併用せられて繪畫的文様となることあり、鎌倉時代に至りて其術益成熟し、螺鈿

のみにてよく繪畫的趣致を現はせしもの無きにあらず、此櫃の如き斯くまでに精緻せる技巧を見るべからざれども、意匠の技排を得て技巧の之に適合せるは、想と技と俱に純熟せる鎌倉時代の傑作と推獎するに足らむ、支脚の配置も藤原時代に在りては、四方に踏張りて櫃身を支持するの威あれども、鎌倉時代は威興の美よりも實用に傾き、櫃身は支脚の上に安定の地位を保つこと此櫃の如くなるを常とす、蓋裏も外側と同じく粗き座地にして、中央四隅俱に花唐草の蒔繪あり、圓に於て左右兩側に色目の異なるは、則ち後の塗替に係れる所なり、花は銀、間々金を併せ用ゐ、蓋は全く金なり、其花瓣に空漏を現はせるは、螺鈿を蒔繪化したる意か、頗る趣致に富めり、此花唐草に於ても亦鎌倉時代の俗を想ひ得られざるにあらず、法隆寺にて出版せる御寶物圖繪に依れば、廣東蜀江の類の御衾を納めし調度は則ち此器なりと傳ふれども、其果して然るか否やを知るに由なし、螺鈿の技術は元と支那より傳來せられたれども其用途風に彼國に絶えしにや、釋して邊裔國土の産、一に羅殿と稱すなどと無稽の説を立て、宋の方勺が泊宅編には螺填器本出倭國物象百態類極工巧非若今市人所售者と云へり、其技遂に我國獨得の發達を爲し、却て輸入せる彼國に誇視するに至れる所以、此櫃に對して思ひ半に過ぐるものあるならむ

## 第六、第九、御物 蓬萊山蒔繪袈裟篋

蓋一尺六寸六分五厘、横一尺三寸八分五厘

篋とは云へ身を逸して殘れる蓋のみなり、地は黒漆なれども内外共

松の枝の描法のみにも、是のよく實物を體得して使用せると、彼の漫然針葉を描けるとは、獨り用意の如何に係はらず、其間に自ら時代の趨勢を察すべきものあり、鎌倉時代の描法も亦此宮よりは平家小唐櫃に脈を連ぬる多きを以て考ふれば、此宮を以て平家時代以前、法隆寺復興の機運に向へる鳥羽天皇頃のものと斷ずるも謂れなき鑑定にあらざるべし、附記す古記には松喰鶴と載せずして鶴喰松と稱せしもあり、言句の上よりすれば其當を得たりと云ふべし

第七、第十四、御物 繪殿繪屏風 前説ノ續  
曆應二年己卯十月廿二日繪殿供養在之中 去年ノ秋比ヨリ始テ漸々書之本ノ繪ノ上ヲ采色也 三十貫文 繪具ノ 五貫文 食料ノ 十貫文 下 色分 一貫文 引分 四貫八百五十文 打地 已上五十貫八百文 成ハ山ヲ賣成ハ諸方勸進云々勸進導師 教由子繪師播磨法橋實圓京人也  
これ前説に載せたる屏風裏書に修復の年度を叙して  
人王九十七代光明院御宇建武五戊寅年 元應 八月十三日始曆應二年二月二十七日修補大功畢 勸進實圓禪觀房上人 湛舜禪房已講修復工太夫君 繪師實圓播磨法橋  
と云へると同時修理の詳細を註せるものにして、材料工費引出物等の一々の用途費目を列挙し、五十貫八百五十文と總費額までを現はせるは、其支出に苦しみて山を賣り諸方を勸進して支辨せると比べ

に粗く座地の金粉を蒔き其上に金銀を以て蒔繪を施す、外側は松喰鶴の亂れ飛ぶ圖にして、内側は則ち龜背に立てる蓬萊山の景なり、外側の松喰鶴は頭より翼に至る頸の後半に銀を用ゐて前半を金とし、翼も金銀併せ用ゐ、其他嘴、眼、松の折枝等皆金なり、内側に散らせる鶴は頸を全く銀とし、其他すべて金を用ゐ、同じ松喰鶴ながら外面にて主位となると内面にて配景となるとに由りて、手法に繁簡の差を現はしたる用意の周到を見るべし、蓬萊山は金にて輪廓の線をつくり、銀にて山側を整へ、處々に金を施して光明反映の意を寓せり、點綴せる洞舎小松は金にして、玉龜の頭の後半及び甲も亦金なり、但し所謂龜甲形内の小き文様は銀にして、頸の前半より後尾に至るまで、甲縁四足皆悉く銀なり、即ち龜の上半は金にして、其方ある光彩に蓬萊山扛負の意氣を示し、下半を銀にして軽く浮遊するの感を興へしめたるなり、波紋また其意を受けて銀を用ゐ、波頭を金として逆捲く力を明かにす、材を使用する唯金銀の二種あるのみ、而も其使用宜しきを得ば、繪畫的趣致を發揮すること此の如きものあり、研磨堆積の術固より未だ發達せずと雖も、徒に豪華を金色に街へる後世の作品とは、藝術的價值に於て雲泥の差ありと云ふべし、法隆寺に蓬萊山を見るは既に標出せる聖靈殿太子像内のものと、今は御物となれる此宮とにして、一は木彫一は蒔繪、材料同じからずと雖も、目指す所の相叶へるありて、製作時代も略相近きを覺ゆ、彼は天仁年度御影安置の時の作と知られたれば、これもまた天仁前後のものとして可なるべし、嚴島神社なる平家奉納の小唐櫃なる松喰鶴を以て此宮のと比較すれば、金銀の用法の差異を別とし

て、松枝の描法のみにも、是のよく實物を體得して使用せると、彼の漫然針葉を描けるとは、獨り用意の如何に係はらず、其間に自ら時代の趨勢を察すべきものあり、鎌倉時代の描法も亦此宮よりは平家小唐櫃に脈を連ぬる多きを以て考ふれば、此宮を以て平家時代以前、法隆寺復興の機運に向へる鳥羽天皇頃のものと斷ずるも謂れなき鑑定にあらざるべし、附記す古記には松喰鶴と載せずして鶴喰松と稱せしもあり、言句の上よりすれば其當を得たりと云ふべし

此の御物に用ひしもの、藤原時代の遺品なり  
既に出せる五綴の鐵鉢と同じきものなり、今其所傳を詳にせず  
第十六、第十八、綱封藏 木造著色菩薩面  
横五寸三分

此の御物に用ひしもの、藤原時代の遺品なり  
既に出せる五綴の鐵鉢と同じきものなり、今其所傳を詳にせず  
第十六、第十八、綱封藏 木造著色菩薩面  
横五寸三分

見て、今は甚だ興味ある資料となれり、曆應二年二月廿七日に修理の功程を畢りしかど、嘉元記に由れば竣功供養は冬季に入りて十月廿二日に行はれしこと明かなり、屏風裏書と本書と相俟つて事實を啓發すること甚だ多しとすべし

繪殿は其名の如く太子一代の傳記を繪にして、其壁に張れるよりの稱にして、此處に參拜せん人共は、親しく此繪傳を見て、太子の御事蹟を知ると共に、渴仰感佩の念に堪へざるものありしは、云はても明かなる事にして、獨り法隆寺のみならず、太子と由緒深き播州の斑鳩寺、京都の太秦寺等にも亦繪傳の壁畫ありて、堂壁の裝飾ともなり、且は信心の助けともなれるなり、斑鳩寺のは板壁に直ぐに畫けるものにして、今は殆ど剝落し盡せりといへども、其古容を思ふべき便なきにあらず、太秦寺のは今や尋ねるに由なしといへども、光明寺道家の日記玉葉承久三年正月廿六日の條に廣隆寺參拜の事を叙して

次參太子堂於御前所誦正觀音咒千遍祈念所思信心殊發定有感應歟  
召出法師一人令說太子御傳奉圖後壁故也次退出歸家於歸路小雨  
と云へり、其太子堂の後壁に御繪傳ありしを證するのみならず、當時の僧神が太子に祈念崇敬せし深きをも併せて明かにすべく、法師を召し出して繪傳を説明せしめしなども甚だ興味ある記事なり、繪殿も其昔しかゝる人々の參拜して壁畫の物語りに信心を凝らせし事ありしならん、此記を讀みて繪殿の過ぎにし跡を思ひやれば、惆悵として今昔の感に堪へざるものあり

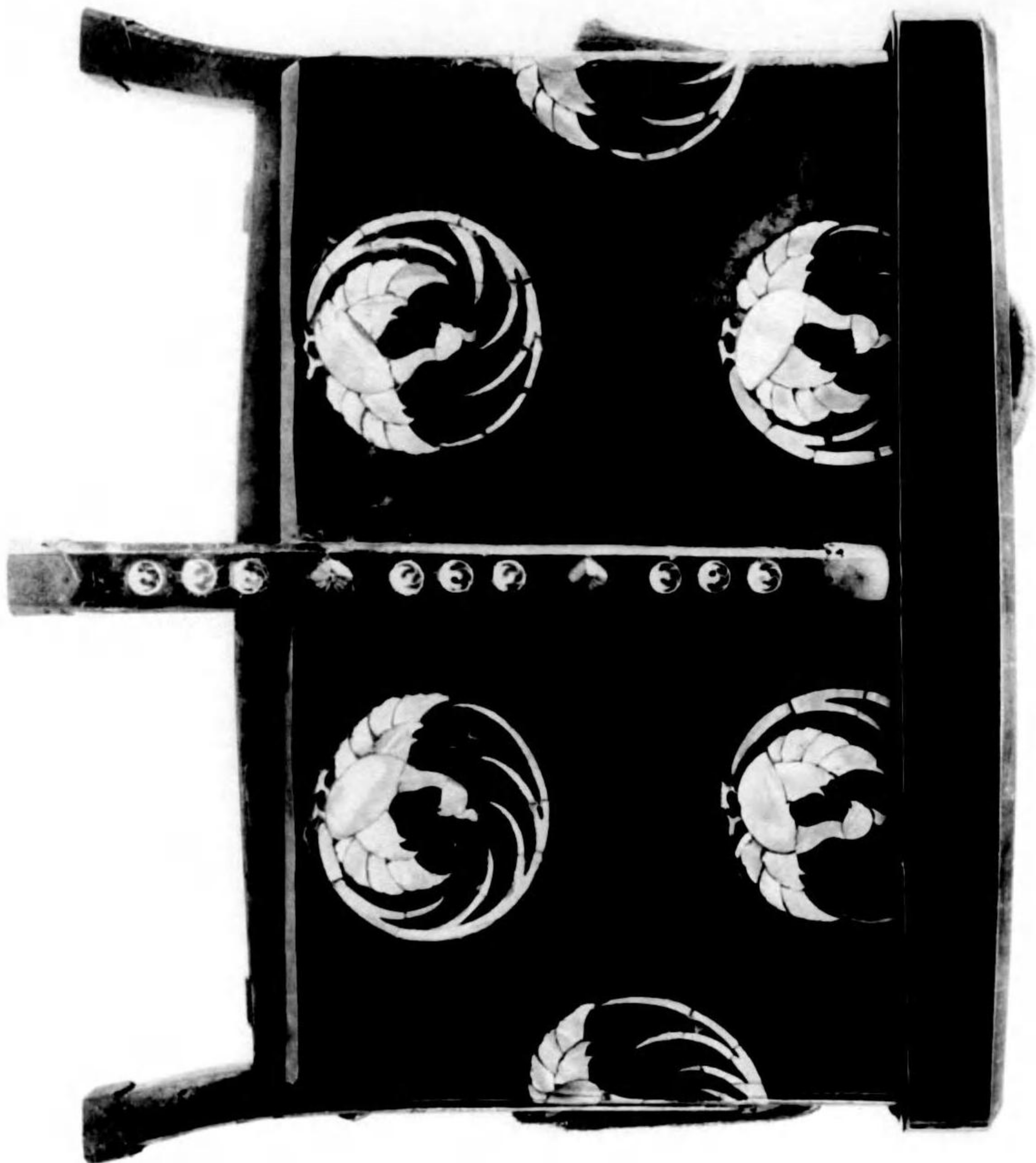
第十五、御物 鐵鉢 原寸

第十六、第十八、綱封藏 木造著色菩薩面

横五寸三分

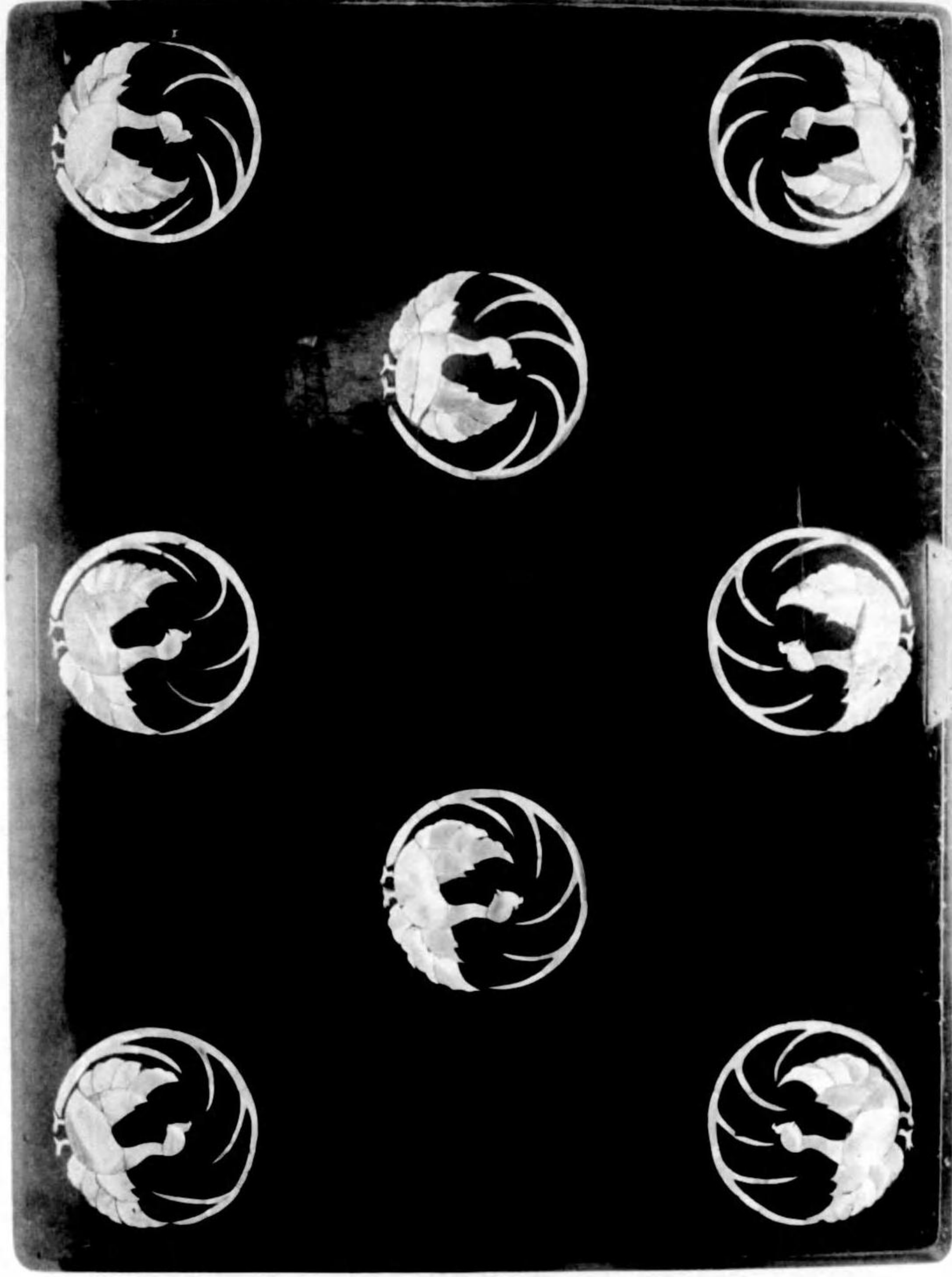


(三六) 扇背紋鳳凰加絨 物御



扇背紋鳳凰加絨

(三三) 桐唐紋鳳凰細螺 物印



桐唐紋鳳凰細螺

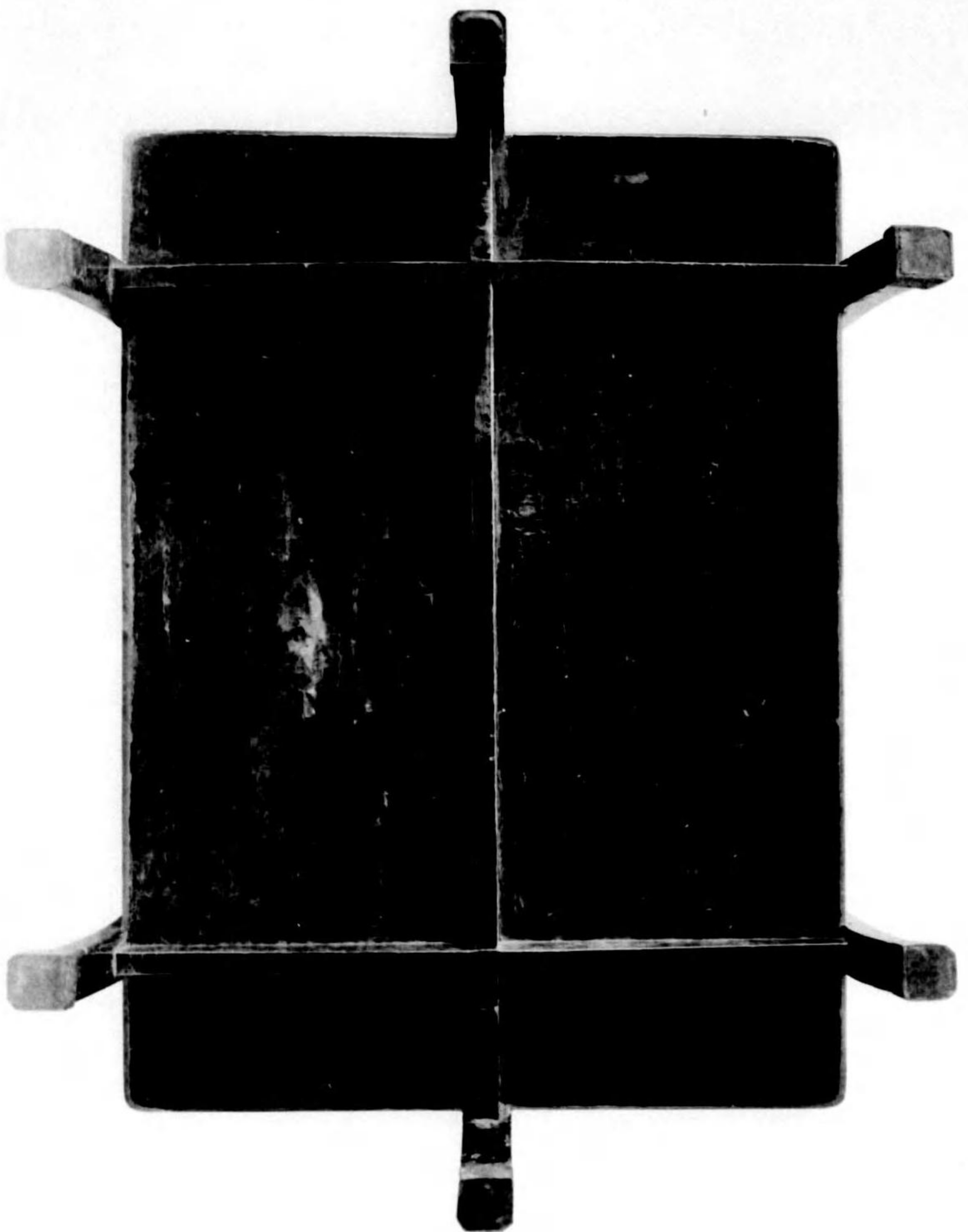


天璋印

物印 鳳凰紋枝唐瓶 (四)



(甲) 銅質鼓風爐銅 物部



東京大学文学部蔵



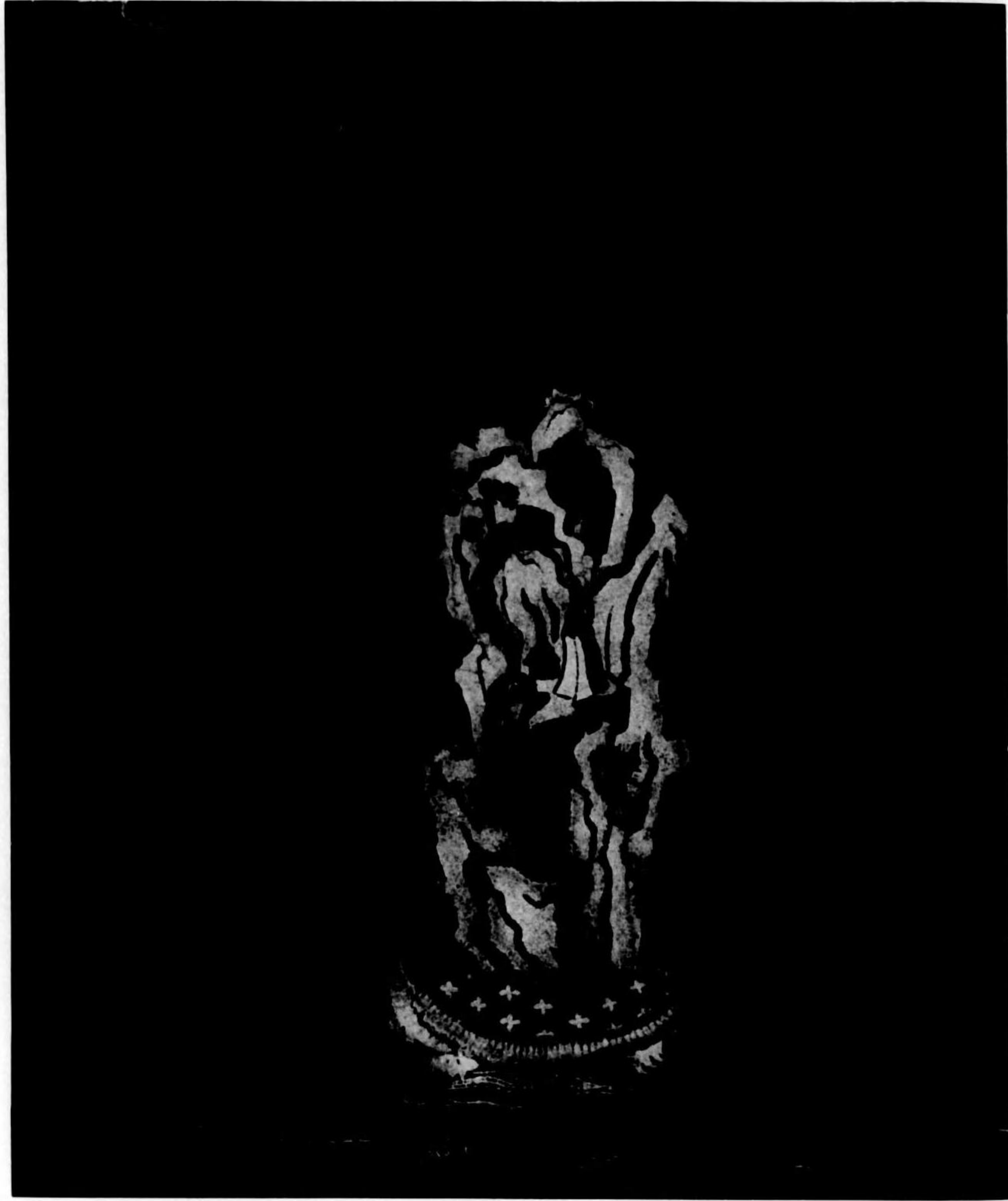
鳥山家畫

鳥山家畫 物師



物即

(二九) 山菜蓬繪物



京都府立総合資料館蔵

(三六) 呂繪山菜蓬 物即



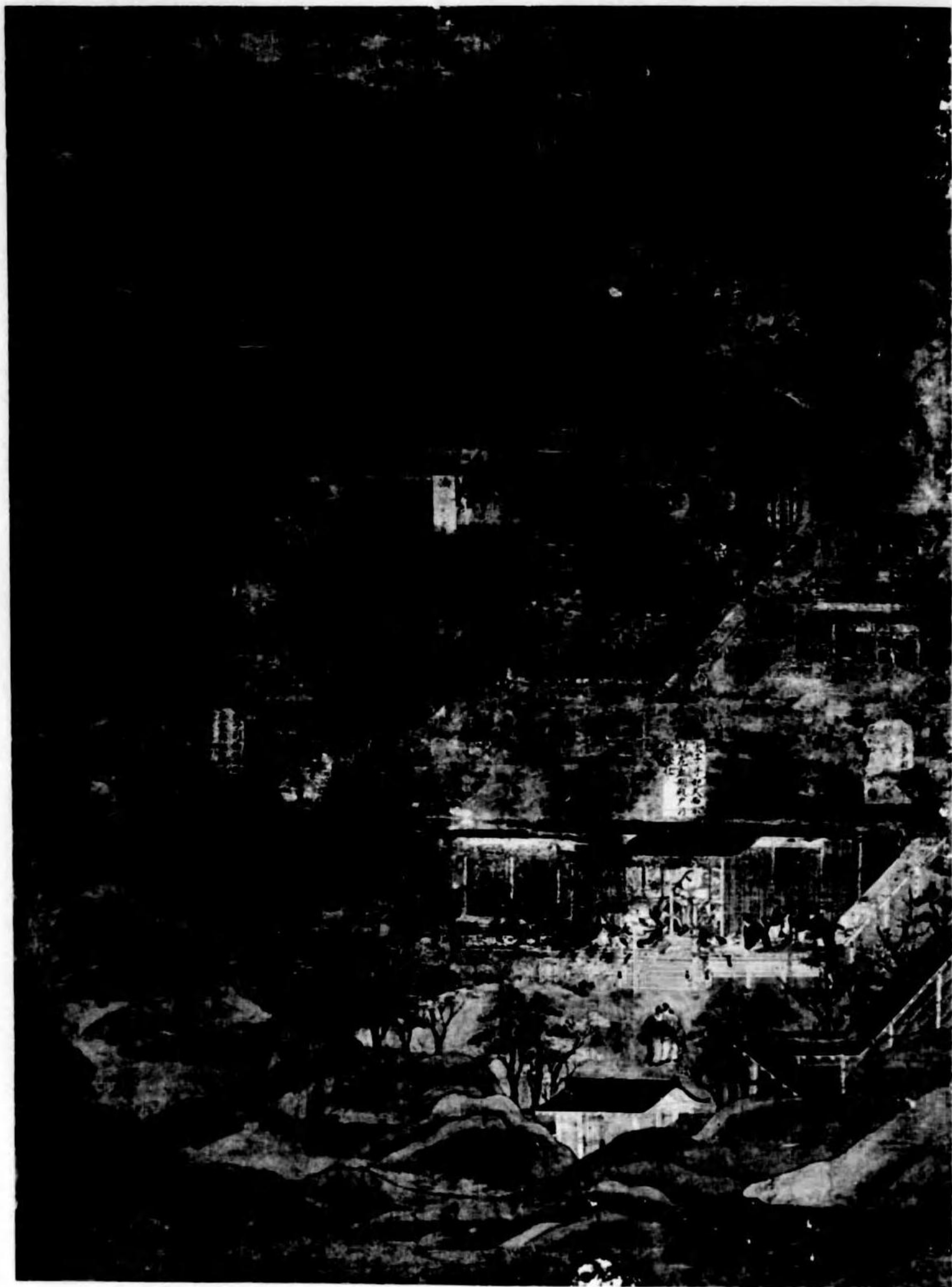
山西大同 雲岡石窟

山西大同 雲岡石窟 佛像



阿爾山風景

阿爾山風景 阿爾山風景



石田正信

隻半右 風屏繪殿繪 物即



石壁畫

雙牛左 風屏給殿繪 物即





第一集 平右 風神繪殿繪 物即

京都府立総合資料館蔵

鉢 物 部



東京国立博物館蔵



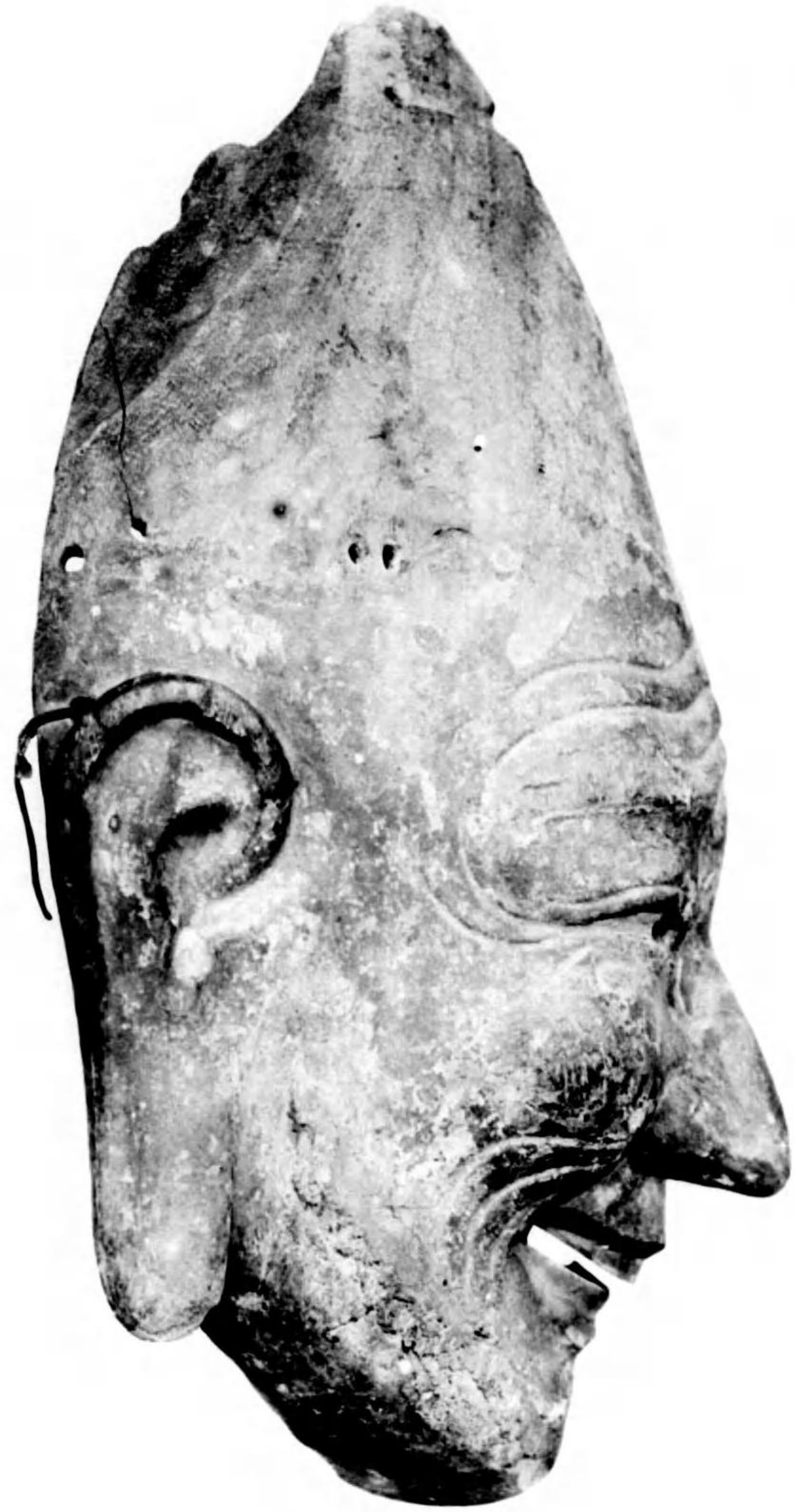
阿彌陀佛

一〇 面有苦色者彫木 藏其銅



阿育王造像

二、面帶苦色者彫木 藏封網



阿彌陀佛

阿彌陀佛 木彫 善色善面



奈良正倉院藏

面繪苦色者彫木 藏其朝

大正五年四月廿六日印刷  
大正五年四月三十日發行

大和國法隆寺藏版  
東京美術學校編輯

發行者 白石村治  
東京市下谷區上根岸町百廿二番地  
印刷者 武田勝之助  
東京市下谷區中根岸町六十八番地  
發行所 墨彩堂  
東京市下谷區中根岸町六十八番地

第廿五集所載智慧輪三藏譯般若心經の解説中に見えたる奥書に「御供姉子」  
せしは川俣姉子の誤なり此に訂正す  
第廿七集所載蓬萊鏡の背面銘に見えたる西村豊後守政重の何人なるかは其後  
本書に同情を寄せらるゝ識者よりの示教により當時の鏡師たりしを明かにす  
るを得たり此段譯で感謝の意を表す

終

